マクラレン(写真NFB)。

映像詩人 ノーマン・マクラレン

日本大学教授　登川　直樹

毎年、夏から秋にかけて、カナダ東部は映画祭でにぎわう。八月にはモントリオールで世界映画祭があり、九月にはトロントで国際映画祭が催される。偶数年だとオタワでアニメーション映画祭がひらかれるが、これも九月である。

一九八三年秋のトロント映画祭で上映された映画のなかに、ノーマン・マクラレンの新作「ナルシス」があった。例によって彼の独創的な表現は注目をあつめたが、そのマクラレンがこの映画を最後に映画製作をやめると発表したことは、もう一つの大きな話題になった。

マクラレンといえば、世界でもっともユニークな製作活動を展開したアニメーション作家であり、その作品の多くが国内でも国外でも受賞を重ねて輝やかしい業績をのこした人である。一九四一年からカナダの国立映画制作庁(NFB)でアニメーション映画ひとすじに歩いてきた。その作品も五十本をこえる。すでに六十九才だから、引退を表明してもおかしくはないが、一作一作にこめられた豊かな感性にふれていると、まだまだその独創的なアイデアと技法で、すばらしい映画を作りつづけてほしい気がする。

マクラレンがカナダの世界的アニメ作家になったのは、まったく運命だったと言っていい。もともと彼はスターリング(スコットランド)の生まれで、グラスゴーの美術学校へ入ったのも父のあとを継いで室内装飾家になるつもりだったからだが、学生時代に映画にとりつかれた。映画館へ通うだけでは足りず自分でも作りだしたのが、彼の映画人生のはじまりだった。というのは、学生生活に取材した16ミリ映画がアマチュア映画コンクールで入賞し、その審査員だったジョン・グリアスンに認められて、彼のもとで映画製作を職業に選んだからである。当時グリアスンは、イギリス政府を説いてGPO(郵政総局)に映画部を作らせ、すぐれたドキュメンタリー映画作家を育てた。若いマクラレンはここでまず記録映画に携り、アイヴァ・モンターギュがスペインに内乱の記録を撮りに行ったときに、カメラマンとして同行した。

作品「パ・ド・ドゥ」から(NFB)。

そのGPO時代に、マクラレンは早くもアニメーションでPR映画をつくった。当時イギリスには図形アニメのレン・ライがいたし、アメリカには踊る図形の音楽映画をつくるオスカー・フィッシンガーなどがいて、それらに大いに刺激されたと彼は述懐しているが、やはりマクラレンには独自の才能がすでに芽をふいていたに違いない。カメラを使わずにフイルムに直接描く手法もこのころ試みている。

グリアスンがカナダ政府に招かれてカナダ国立映画制作庁の設立に尽力し、その初代長官になったころ、マクラレンはアメリカにいた。せっせと絵を描いたり、グッゲンハイム美術館の仕事を手伝ったりしている。が、再びグリアスンに招かれて、こんどはNFBへ入る。そして思う存分、実験的なアニメーション映画を作った。初期のNFB時代は、音楽アニメ映画の実験期だったと言っていい。民謡や行進曲にのせて図形を踊らせるような、せいぜい二、三分の短編が多かった。もちろん貯蓄奨励だのインフレ防止だのといったメッセージをもってはいたが、彼のような実験的アニメを許したというのは、すぐれた才能に幅広い理解を示すNFBの運営方針のあらわれである。

マクラレンが国際的に認められた最初の作品は「隣人」(一九五二)である。隣り合った家の男たちが境界線上に咲いた一本の草花をめぐって大乱闘を演じる話は、滑稽な上に意味深長で、そのラストの「だから同胞に親切に」の各国語の字幕が意味するように、平和への願望がこめられている。さすがに彼が「ユネスコの派遣で中国へ渡って友情の尊さを知り、帰国後朝鮮戦争が勃発して大いに考えさせられた。それがこの作品を生む動機に

黒いフィルムに音を彫り込むマクラレン(NFB)。作品は「算数遊び」。